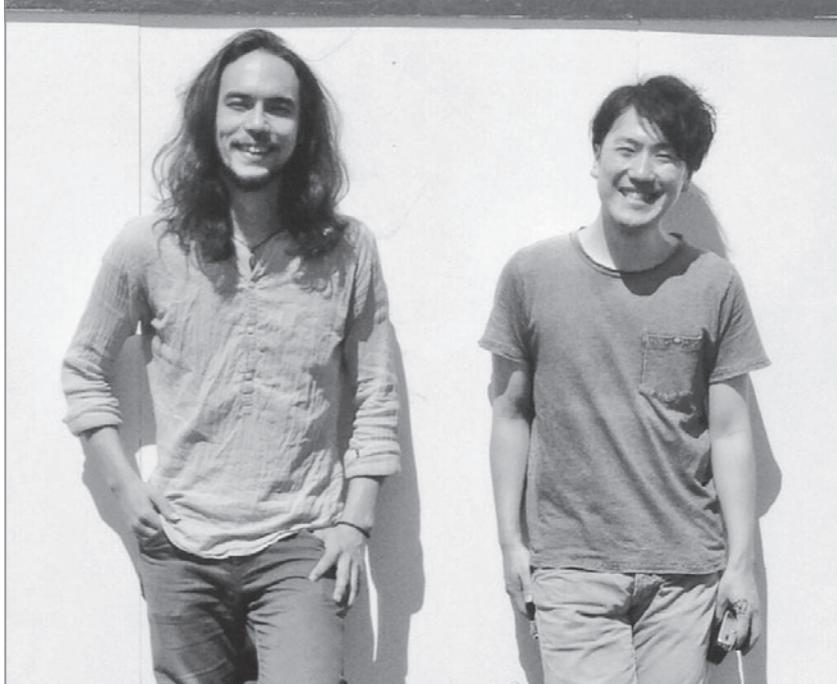


INTERVIEW：インタビュー



今月号のインタビューでは、ギター奏者のカイ・ペティートさんとハーモニカ奏者の倉井夏樹さんからお話を伺いました。お二人は、ソロ活動のほかに「Kai Petite & Natsuki Kurai」（通称「カイ&夏樹」）として精力的な活動をされています。独特なギターを操るカイさんと独特な音色を奏でる夏樹さんの音楽に対するこだわり等を伺うなかで、仕事を楽しむことの大切さを感じました。

（聞き手・構成：木村 容子）

ギター奏者

カイ・ペティートさん

ハーモニカ奏者

倉井夏樹さん

ギター、ハーモニカを始めたきっかけ

——カイさんはギターを、夏樹さんはハーモニカを演奏されていますが、まず、お二人がギターとハーモニカに触れたきっかけについてお伺いしたいと思います。

カイ：中学2年生のときです。大学で英語や社会学等を教えていたお父さんの教え子の方にギター好きな方が多くて、その方にエリック・クラプトンの「Tears In Heaven」を丸一日かけて教えてもらって、そこからギターにのめり込みました。家族が音楽好きで、歌って弾いてというのが家の中に常にあったので、自然な流れでしたね。

夏樹：僕は正直覚えていないんですが、5歳くらいのとき友達の誕生日会でハーモニカを左手に持っている写真があったので、そのころから始めたんじゃないかなと思っているんです。始めたきっかけは、僕も父の影響があって。実は、僕、新潟のお寺の息子で、

音楽好きの住職の父がハーモニカも好きで、父から壊れたハーモニカを譲り受けたのがきっかけだと思います。

——お寺でハーモニカとは意外ですね。

夏樹：皆さん結構意外と仰る方が多くて。でも、実は、お寺の本堂には音楽を演奏している絵が描かれていたり、お経にも歌の要素があったり、音楽とお寺には親密な関係性があるんです。もともと、僕のお寺もライブとかをやっていました。

——お二人ともご家族の影響が強かったということですね。

夏樹：それは大きいよね。

——では、お二人が本格的にギターとハーモニカの道に進まれたきっかけについてお伺いします。まずカイさんからお願いします。

カイ：始めたときからビビッとくるものがあった、「Tears In Heaven」を全部一個一個教えてもらってから長いお付き合いになるだろうなという気持ちでした。また、自分にとって、音楽から、上達する喜びや、

協力し合わないといいいものができないということを感じることができましたし、ギターだけは誰にも譲れないというものだったので仕事というよりは自分を確立するための一部のような存在でした。

—その後、カイさんはボストンのパークリー音楽院に進まれたんですね。

カイ：はい。高校生のときに将来どうするのという話になっていたころ、僕が大好きだったバンドメンバーがパークリー音楽院に行っていたということで、「パークリーっていいな。僕は父親がアメリカ人なのにずっと日本に育って一度も行ったことないし」という想いがあったんです。僕は毎月「ヤング・ギター」という雑誌を買っていたんですけど、ちょうど、その雑誌の後ろの方にパークリー音楽院の奨学金オーディションのことが載っていたんです。そこに2年生か3年生の夏に応募して、すごく微量ながら奨学金をもらえることになって、父親の許可も得られて、行くことになりました。

—パークリー音楽院ではどういうことを学ばれたんですか。

カイ：ゼロから学ばせていただいたというか、僕は本当に無知で、自分の好きなアーティスト等は聴いていたんですけど、当時カップヌードルのCMでゲロッパと言っていたジェームス・ブラウンもコメディアンだと思っていたんですね。そうしたら、ジェームス・ブラウンってものすごく歴史的に重要な人だったことを知って、世の中に色々なミュージシャンがいることや音楽の歴史を学びに行った感じですね。あとは、世界中から同じ夢を持った人たちが集まってきていて、人との出会いが大きかった。その場所にいること自体が教育でした。

—そこでの勉強や生活は大変でしたか。

カイ：1学期目はみんなの才能がすご過ぎて「高いお金を親に払ってもらっているのにやばい、何しちゃっているんだろう、僕」と結構打ちのめされちゃったんですけど。その後、そこで、結局音楽って自分が

何をしたいかどう表現したいかということだから競争じゃないんだよということも学べたんです。

—夏樹さんは身近にあったハーモニカをいつから本格的に極めようと思われたのですか。

夏樹：小学校3年生のとき、僕がハーモニカをやっていることを知っていた当時の担任の先生から「お楽しみ会で2曲演奏してよ」と言われたんです。家族以外の人前で吹くのが初めてだったので、すごく緊張して下を向きながら「おおスザンナ」という曲と当時練習していたブルースを吹きました。そうしたら、みんな沢山拍手をしてくれて。緊張して恥ずかしかった分、その歓声が嬉しくて。たぶんその翌月にも知り合いのお寺の野外コンサートで演奏させてもらって、皆さんに喜んでもらって、ハーモニカを人前で演奏するのって楽しいんだなというイメージを持ったんですね。

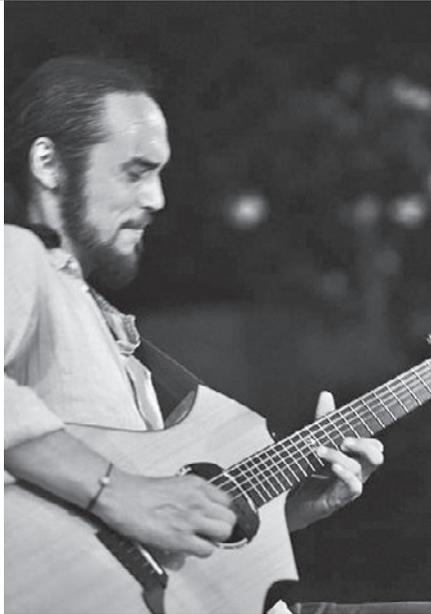
—どうやってハーモニカを学ばれたのですか。

夏樹：ハーモニカを練習したかったので、松田幸一さんという日本のハーモニカプレイヤーの方のビデオを買いました。そのビデオを家に帰って再生してみたら、1曲目に入っていたレイ・チャールズの「Georgia On My Mind」という曲がすごくかっこよくて衝撃を受けて、ハーモニカ奏者という職業に憧れを持って、僕もこういうふうにはハーモニカを吹けるようになろうと考えたんです。

—なるほど。

夏樹：また、僕が小学校3年生のときに、ちょうど本堂を改築するので改築前に旧本堂で地元のフォークグループのアルバムをレコーディングしようという話になって、僕もハーモニカで参加することになりました。お父さん世代のプロの音響の人や音楽仲間の人に来て録音が始まって、音楽をやっていると色々な人と出会えるんだなというのを子どもながらに知って、楽しかったですね。

—音楽を通じての人の出会いというのは、お二人の中で共通のテーマなんですね。夏樹さんも海外とのつなが



自分とは何ぞや、自分をどう素直に表現できるか、それを人がどれだけ喜んでくれるか。音楽に対する、そこが唯一のこだわりかな。

カイ・ペティート

Kai Petite (guitar) かい・ぺていと

1981年3月1日 神奈川県鎌倉市生まれ。父と兄の影響で14歳からギターを始め、17歳より都内のBARなどで演奏を始める。2001年 ボストンのパーカー音楽院に入学。2002年 Gibson Jazz Guitar Contest バンド部門で優勝。2004年 Professional Music 科を卒業。オープンチューニングやアコースティックギターにベース弦を張った通称変態ギターを巧みに操り、独自のリズムとスタイルで世界を表現する唯一無二の音楽家である。

りがあるとお聞きしました。

夏樹：高校卒業して海外でもやってみたいという気持ちが芽生えていたころ、オーストラリアのシンガーのスチュ・ラーセンを紹介してもらいました。僕は全然英語を話せないんですが、片言な英語でも意気投合して、一緒に演奏したらお互いにいい反応があって、翌年から1年に2回ずつぐらいオーストラリアに行く機会をいただいたんです。

ギターとハーモニカの魅力

— 次に、カイさんにとってのギターの魅力とは何ですか。

カイ：ギターって6本の弦ですけど、低音や和音からメロディーまで全部弾くことができる楽器なので、1人でいても音楽を完成させることができるという部分に魅力を感じています。どこにでも持っていけるという気軽さもありますし、今も後ろに2本運んでいます。

— いつも2本運ばれているんですか。

カイ：はい。1本は鉄弦のいわゆる普通のギターです。もう1本は1人で演奏するときにもうちょっと音のレンジを広げるため、ベースの弦を下に2本張り替えて、上の高い方の弦つまりギターの弦も4本張っていて、まるでベーシストとハーモニーを弾く人が

いる感じになるんですね。この2本を使い分けています。

— その弦を張り替えてあるギターは「変態ギター」と呼ばれているようですが、何故「変態」と呼ばれているのですか。

カイ：ラジオの生放送に出させていただいたときだったと思うのですが、ギターが変わっていますけどどういふものですかと聞かれて、楽器の特性を説明した後に「これって何か特殊な名前とかあるんですか」と聞かれ、僕、思い付かなくて。生放送って2秒、3秒沈黙になると放送事故になってしまうので、咄嗟に出た言葉が「変態ギターです」でした。

夏樹：いい名前だと思うよ。

— 印象に残って、覚えやすいですね。

カイ：たまに変態ギタリストと間違えられて（笑）。

— 夏樹さんにとってのハーモニカの魅力は何ですか。

夏樹：僕の使っているハーモニカは小さくて、10センチメートルぐらいのものなんですよ。小学校のころはあまり友達にハーモニカをやっているということを書いていなくて、秘密の楽器みたいな気持ちでいつもポケットやランドセルに忍ばせて、帰り道に練習していたんですが、そういう手軽さが一番魅力かな。どこにでも旅行にも持っていけるし、すぐ音が出せる楽器なので、いつも身近にあるようなところが好きですね。

—— 別々の楽器ですけど、好きな理由は結構似ていますね。

カイ：うん、電気もいらないうし。

夏樹：だから2人でどこでもできるもんね。

—— お二人それぞれの音楽に対するこだわりについて伺います。

カイ：自分たちが気付いている以上にたぶん細かい演奏方法とかめっちゃくちゃこだわっていると思いますが、僕が一番こだわっていることといえば、自分とは何ぞやとか、自分をどう素直に表現できるかということとか、その自分を出したうえで人がどれだけ喜んでくれるかという、そこがメインかなと思っていますね。若いころは、人からどんどん吸収して、それこそ自分が好きなギタリストやアーティストの顔の表情や首の角度までその人になりきっていた。でも、それをやっていくうちに「やっぱり似ているね」とか「彼が好きだね」と言われちゃうのが嫌になりました。僕も、彼らに独自の個性が出ているからこそ、感動を受けたわけで、自分の個性を表現したいことが唯一のこだわりかな。

夏樹：僕のこだわりといえば、ハーモニカで誰もやらないことをやるということです。ハーモニカって本当に手軽に持ち歩いてすぐかっこいい楽器だと思うし、誰でも吹ける楽器なので普及させたいですし、ハーモニカでも多重録音等をできることとかそういう世界を僕が見せていけたらいいなと思うんです。

カイ：うん。唯一無二でナンバーワンじゃないけど、誰もやってないような、僕の変態ギターとかも別にベーシスト雇えばいいじゃないと言われちゃうことを、あえてやる。でも、それを使ってどうだ、ということではなくて、あくまで自分を表現するためのツールとしてユニークになってきたというか。

—— なるほど。夏樹さんのハーモニカの音色がチェロやオルガン等の音に聞こえることがあるのですが、あれはどうやって出されているのですか。

夏樹：エフェクターという機械を使ってやるときもあ

りますし、そのチェロみたいな音色は自分の吹き方です。研究というか、こうやって吹くとチェロっぽいなと自分の中で発見があって。チェロの人が最初に弓を引いて徐々にピブラートをかける感じや、オルガンの人のタッチの仕方、細かいニュアンス等を、ハーモニカでやったら面白いんじゃないかなと。

—— それは狙って出されているんですね。

夏樹：そうですね、この曲にはこれが合うとか、エフェクターで変な音を出してとか、たまにやりすぎて失敗したりするんですけど。ただ、失敗から学ぶことも多いので、そういう挑戦は僕の中のテーマの1つです。

2人の出会い

—— お二人の、出会いのきっかけを教えてください。

夏樹：2007年ころかな。

カイ：僕の知り合いでジョージ・カックルという、鎌倉のInterFMでDJをしているちよいワルおやじがいるんですけど。

夏樹：ちよいワルおやじ、それ書いておいてください(笑)。

カイ：彼から、金沢文庫にあるザ・ロード・アンド・ザ・スカイというハワイアンテイストのバーを紹介していただいて。そこのオーナーになっちゃん(夏樹さん)を紹介していただいたのがきっかけですね。

夏樹：その場でセッションしたらすごく楽しくて、すごく合うと直感的に感じました。たぶんその年の3月とか毎週一緒にやっていたかな。

—— 自然に組まれた感じですか。

夏樹：うん、そのときからカイ&夏樹という名前だったよね。2年間くらいたぶん色々なところで演奏させてもらっていたんですが、その後カイ君もデビューして、僕も色々やり始めて、なかなか一緒に演奏しない時期がたぶん3、4年ぐらいあるんです。だけど2013年にカイ君がライブやろうと声を掛けてくれた

んだよね。やってみたら、僕もそのチェロの音とか出す新しいスタイルになっていて、また、カイ君も変態ギターを扱う変態ギタリストになっていて、新しい感覚がありました。

カイ：うん。人間的にお互い色々経験して、それも音の深みとかに全部出ている。

夏樹：互いに自信が付いている感じがあるよね。そうして、あらためて意気投合して色々やり始めようという話をして、今に至るんです。

—— ソロで演奏される場合と2人で演奏される場合の違いはありますか。

夏樹：全然違いますね。

カイ：うん、僕はソロでやるときはブラックコーヒーなのが、なっちゃんが入るとガムシロップとミルクが入るぐらい。

夏樹：コーヒーに例える（笑）。

カイ：やっぱりその化学反応ですよ。ライブではその世界に浸ってもらうので全く意味が違う。何かこう、半分腐ったミカンが直っていく感じで僕が感極まってほろっときたりすることもある。言葉で上手く表せないですが、足し算というよりも二乗みたいな。

夏樹：自分のやりたいことをはっきりと表現できるし、それをさせてもらえて素晴らしいパートナーだと思っています。

カイ：うん、お互いの人間性やアイデアを尊重し合っていると思うし、僕は彼の音楽や生活に対するアプローチも尊敬しています。自分にないしっかりしているところやクリエイティブな考え方など。経理、広報も彼が中心で（笑）。

夏樹：いやいや。でもやはり2人で1つじゃないですけど、こういうのって足りないところは補いながらいけば一番いい形ですから。ぶつかり始めてもよくないですし。

カイ：人と何かする場合、いいことばかりじゃないし、喧嘩もするだろうし大変じゃないですか。でも、主張の仕方がすごくちょうどいいんです。

—— お二人で音楽活動をされる時、伝えたいメッセージはありますか。

カイ：僕は先ほど話した通り、自分とは何ぞやというのを素直に出していきたいし、自分が感じる素晴らしいものやこれいいよねと思うものを感じてもらいたい。あとは、その場のライブの空気をやっぱり体感してほしいですね。たしかにCDもDVDも素晴らしいけど、振動とか、その場の雰囲気とか、それこそストリートだったら町のノイズ等が全部絡み合っていて、その日その時間だけのパフォーマンスになると思うんです。唯一メッセージがあるとすれば、テクノロジーが発展していつでも動画を無料で見られるという時代であっても、生で体験することの大切さがあるということを僕はすごく伝えたいですね。

夏樹：日本で生まれて僕は英語を話せないけど、いきなり海外とつながりを得て、ハーモニカで色々な人とセッションしていったので、本当に音楽は世界共通の言葉だと思うんです。音楽は子どもからお年寄りまで誰とでも仲良くなれる手段だし、こういうふうに音楽を楽しんでいることを皆さんに見ていただきたいですね。

カイ：音楽は、自分の世の中とのつながり方というか、逆に僕は音楽ないと何したらいいんだろうというくらい、一番自分にとって分かりやすいコミュニケーション手段なんですよ。僕は学校で歌を通して英語を教えているんですが、歌はすごく記憶に残るし、僕のギターを使って英語だけで話しかけて、踊らせたりすることで、生徒たちに言葉の意味を分かってもらえることも素晴らしいと感じています。

今後のビジョン

—— 最後にお二人の今後の活動のビジョンや夢をお聞かせください。

夏樹：日本から世界、そして世界から日本みたいなことができればいいな。日本という生まれた国は大事

INTERVIEW: インタビュー

英語を話せないけど、海外とつながりを得て、ハーモニカで色々な人とセッションしていった。音楽は世界共通の言葉だと思うんです。

倉井夏樹



Natsuki Kurai (harmonica) くらい・なつき

新潟県出身。1988年5月30日生まれ。19歳の頃から横浜へ移り住み、ジャンルにとらわれない国境を越えた旅を続けながら年に200本近いライブ、セッションライブを送る。今までに3枚のソロアルバムをリリース。2013年にはオーストラリアのシンガーソングライター Stu Larsenとヨーロッパ8カ国を回るツアー。そして2014年からは自分自身を広げていきたいと様々な活動を行っている。時にはチェロ、時にはオルガンにさえ聴こえるハーモニカの音色、エフェクティブに繊細に音を響かせる自由型ハーモニカプレイヤー。

だし、そこでの音楽のつながりも大事だし、それを吸収してから世界へという。

カイ: 僕も昔は音楽といえば海外という固定概念があったんですけど、日本って僕が知っている以上に才能ある人に溢れているし面白い場所なんですよ。

夏樹: 今は色々な動画のシェアから始まって、FacebookやTwitter等で情報を共有できる時代なので、日本から発信できることもたくさんあるなど。そして2人で世界中ツアーをしたいね。

— どのようなツアーですか。

夏樹: 例えば結構身近な路上ライブ、バスキングと言うんですけど、それで世界中を回れたら面白いな。

カイ: 路上演奏って小銭しかもらえないようなイメージがあるかもしれませんが、それでかなりしっかりした生活をしている方もいます。何が一番いいかといったら、素直な音楽の受け渡し方であるところかな。その場に行ってその町の雰囲気、ある意味真剣勝負。もちろん、名前があるホールでやらせていただくのもすごくカッコいいし、できたら幸せ。

夏樹: それもやりたいんですけどね。

カイ: だけど普段の生活をしていて別に音楽ファンでもない人たちが「音楽っていいね」となれるチャンスって、やっぱり街中にあるんじゃないかな。それはすごく素敵だなと思っていて。

夏樹: 路上でやっていて思うのが子どもって食い付

いてくるんです。そういうホールではできない出会いも好きです。

カイ: 夢といえば2人の作品も作っていききたい。

夏樹: やっぱりお互いソロミュージシャンでもあるので、カイ君もCDを作り、僕もCDを作りつつ、うまくバランス取りながら作りたいね。

カイ: そこが不思議なんだよね。他の活動を全部やめて2人だけでずっとやっていくというわけじゃないんです。お互い色々やっているからこそ、また2人が会ったときに、新しいものが生まれる。

夏樹: 色々な人の世界を見て感じて知って、それで2人でやったらこうなるというのが毎回新鮮なんですよ。

カイ: パートナーという呼び方はすごくしっくりくるんですが、そこに縛られずというんですか。結構バンドメンバーになったりすると嫉妬があったりして「何でお前、あいつとやって」とかいう話になることがあるんですけど、そういうスタンスではないんです。あくまで2人の独立したミュージシャンがいて、お互いメインなんです。

夏樹: 曲によってどちらかがメインのときもあって、2人がメインのときもあるという、その見せ方も面白いなと思っています。

— 音楽を楽しむことの大切さを改めて感じました。本日はありがとうございました。